



セイレーンの涙

見えない愛につながれて

ティファニー・ライス

藤峰みちか 訳

試し読み版
【ウェスリー編】

息をのむほどの美しさと淫らな作風で人気になり、
何不自由ない暮らしをしているエロティカ作家のノーラ。

そんな彼女にも悩みがあった。

これまで普通の恋をしたことがないのだ。

歪んだ欲望のことなら15歳のときからよく知っているけれど、
どうやったら愛し合ってしあわせになれるの……？

そんなとき、ハンサムな敏腕編集者ザックがノーラの新しい担当者として現れて……。

魅力的なキャラクターたちが繰り広げる、
それぞれの愛と欲望の形——



ノーラ：
エロティカ作家。
心に闇を抱えている。



ザック：
ノーラの新しい担当編集者。
堅物で口が悪いが敏腕。
ノーラに惹かれる。

~~〈ザック編〉を試し読み~~

彼女の才能を開花させる
年上の男

すべてを教えてくれた

昔の恋人



ソルン：
謎の多い人物。
ノーラの初めての恋人。

~~〈ソルン編〉を試し読み~~

無垢な体を捧げようとする
年下の学生



ウェスリー：
ノーラ同居人。
19歳の大学生。ノーラに
一途な想いを寄せている。

~~〈ウェスリー編〉を試し読み~~

何
ボクを削除した
その理由は何ですか？
さっさとさっさと



ノーラはキッチンの窓辺に立ち、暗闇に目を凝らした。冬の日暮れはあまりにも早く、一日がまるまる闇の中で過ぎるかのようだ。ザックは数時間前に帰っていき、多くのアイデアと注意を残していった。でもいまは、キッチンの窓から街灯の明かりを受けて踊る雪片を眺めながら、ただ考えることしかできなかった。

物音が聞こえて振り返ると、ウェスリーがドア口に立って、こちらをじっと見ていた。

「いつからこんな暗いところでぼんやりしてるの？」

ノーラはため息をついた。

「暗くなってからずっと」

ウェスリーは部屋の明かりをつけようと手を伸ばした。

「つけないで」

ウェスリーは手を下ろした。

「暗闇でも書けるなんて知らなかったよ」

ノーラは彼にかすかな笑みを向けた。

「暗闇の中で私に何ができるか知ったら、あなた驚くわよ」

ウェスリーは顔をゆがめた。

「ザックはそのことを知ってるの？」

「ううん。彼は私をただの物書きだと思っているわ。そう思わせておきましょうよ」

「僕はなんだかいやだな」

「ウェス、あなたがこの仕事の契約をしたとき、私は何者かあなたは知ってたわね」

「ノーラと一緒に暮らそうと言われたとき、そのことを僕がどう感じたか、ノーラは知ってた」

ノーラはゆっくりと深く息を吸った。

「それでもあなたは引っ越してきた。それはどうして？」

ウェスリーは顎を上げてただ彼女を見ている。

「“彼の沈黙がすべてを語る”ね」

ノーラは窓から離れて、戸棚からワイングラスを取った。

「何してるの？」

ウェスリーは暗いキッチンの奥へ進みながら尋ねた。

「あなたがふくれっ面をする気なら、私は飲もうかな」高価な赤ワインをグラスに注ぐ。

「赤ワインは糖尿病にいいって何かで読んだわ。欲しい？」

「僕はふくれっ面なんかしてないよ。いらない」

「あなたがしないことはたくさんあるわね」

ノーラはキッチンテーブルの上に座った。向こう側のウェスリーを見て、話すことも、この場を離れることも、目線で制した。

「宿題があるんだ」

彼が言った。

「だったら行けば」

ノーラはドアを指し示した。

ウェスリーが横を通り過ぎようとしたが、ノーラは彼の胸に手を伸ばして止めた。

「やっぱりここにいなさい」

ノーラはゆっくりとワインを飲んでから、グラスをテーブルに置いた。彼のシャツをつかみ、自

分のほうへ引っぱって、膝のあいだに立たせる。彼は無表情で、目を見ようとしなない。
ノーラは彼の胃のあたりに手を置き、Tシャツ越しに筋肉が震えるのを感じて微笑んだ。

「ノーラ、やめて――」

「ソルンと私はよくキッチンテーブルの上でゲームをしたわ」

ウェスリーの懇願を無視して言う。

「話したことあったかしら」

「いや」

ノーラがシャツを引き上げてその下に両手を差し入れると、ウェスリーは目に見えて緊張した。
彼のあたたかな肌にてのひらを押しつける。

「シンプルなゲームよ。彼がワイングラスを高価な赤ワインで満たし、テーブルの縁に置くの。
そして私をファックする。激しくね」

ウェスリーがたじろぐと、ノーラはにやりと笑った。

「もし私がじたばたしたり抵抗したりしてグラスを落とすと……その夜に流れる赤い色はワイン
だけじゃなくなるの」

ウェスリーはそのイメージを遮断しようとするかのように目を閉じた。

「ほんとはね」

ノーラはウェスリーの胸を爪でなで上げ、また腹に戻った。

「私、ときどきわざとグラスを落とすのよ」

「僕はノーラとそんなゲームをする気はないよ」

ノーラは彼の胸と脇腹のデリケートな素肌を容赦なく愛撫し続ける。

「こんなゲームもする気ないし」

「ゲームでなくてもいいのよ、ウェスリー」

ノーラは猫のように目を細くした。

「本物にしてもいいんだから」

「こんなことしないで」

彼の声は懇願だった。呼吸はしだいに荒くなっている。

「あなたの心臓、ドキドキしてる」

ノーラはウェスリーの左胸に手を置いた。

彼の胸から腹へゆっくりと手を移し、ジーンズのいちばん上のボタンを巧みに外す。ウェスリーは息をのんだ。

「ノーラ……」

「私はあなたを押しつけてるわけじゃないわ。行きたいなら行けばいい。どうする？」

彼女はウェスリーのジーンズのベルトループをつかみ、さらに引き寄せて、彼の腰を自分の内腿に押しつけた。こんなことをするべきでないのはわかっている。でもウェスリーはつねにノーラの欲求不満のもとだった。ときどきやり返してやらないと。

「わからない」

ウェスリーはようやく答えた。

「あなたとしては率直ね。ついでに教えて。あなたはなぜザックにむかついてるの？」

ウェスリーの目が見開かれた。ノーラは下唇を噛んで答えを待った。

「ノーラはあの人が好きだから」

「確かに好きよ」

ノーラはもうひと口ワインを飲んで、またグラスを置いた。

「でも私と彼は会ったばかりだし、ファックしてないわ」

それを聞いてウェスリーは陰鬱に笑い、天井を見上げた。

「ノーラがあの人とファックしても、僕はぜんぜん平気だ」

「ま、いまあなた“ファック”って言った？ 善良で清いメソジストが。あなた悪態をついたりしないわよね」

「僕がどんなことをするかなんて、ノーラはぜんぜん知らないよ」

「知ってる。あなたは寝室のドアをロックしないで寝るわ。私が入ってくるのを期待してる？」

「ノーラが夜に僕の部屋のドアの内側に立って、僕が寝ているのを見てるのを知ってる。誘われ

るのを期待してる？」

今度は目を見開くのはノーラだった。しかしすばやく立ち直った。

「このゲーム、あなたなかなかうまいわ」

ノーラはうなずいた。

「初心者にしては」

「言ったよね。僕はノーラとプレイする気はない」

「残念。きっと賞品を気に入ると思うけど」

ノーラはジーンズの次のボタンに移ったが、ウェスリーに手首をつかまれた。

「もっと強く」

ノーラが言うと、ウェスリーはやけどをしたかのように手を放した。

「行きなさい」

ノーラは両手を下ろした。ウェスリーは一步後ろに下がった。

「ちゃんと宿題をやるのよ」

ノーラはほとんど忘れていたワイングラスを手に取り、唇に当てようとした。ところが、飲まないうちにウェスリーがグラスを取り上げた。

彼はかすかに震える手でグラスを持ち、口元へ持って行って飲んだ。飲み干すとグラスを彼女の隣に置いて、何も言わずにキッチンを出ていった。

ノーラはグラスを手にとって中を見つめた。

ウェスリーは一滴残さず飲み尽くしていた。

グラスを置いてあとを追いかけてかけた。たいていは自分のせいとはいえ、喧嘩はいやだ。

ウェスリーは大丈夫——そう自分に言い聞かせる。彼には多少のたくましさが必要なのだ。初めて彼に会った日のことは忘れられない。教室に入ったとき最初に気づいたのは、まるでいままでこんなものは見たことがないというように、ノーラを見ている大きな茶色の目だった。彼が口を開くが早いか、柔らかな南部の言葉が出てきて、この子は果てしなく厄介になると思った。ノー

ラは学生全員に、好きな物語について話をさせた。ウェスリーは自分のお気に入りにはO・ヘンリーの『賢者の贈り物』だと言った。妻は自分の髪を売って夫の時計の鎖を買い、夫は時計を売って妻の髪をすくための櫛を買ったという話だ。ノーラはそれをホラーと呼んだ。ウェスリーは反論してラブストーリーだと言った。その議論は授業が終わっても続いた。ふたりがそれぞれ最も価値のある持ち物を、愛のために手放して、無駄に終わる——それがラブストーリーですって？

ノーラは詰問した。ふたりにはまだお互いがいると、ウェスリーは主張した。ノーラは笑って言った。私の年齢になればもう少し違ったものの見方ができるかもしれないわよ。今夜は彼に手荒いまねをしてしまったが、ときどき自分が抑えられなくなる。何せ、私がウェスリーの年のころには、ソルンに十種類もの地獄を味わわされたのだ。そしていまは、ソルンに調教されて精神的な強さを養われたことを、感謝している。ザックのような男に“僕の時間やエネルギーを費やす価値は君にはない”と、じっと目を見て告げられても、私は見返してにっこり笑い、“あなたにできるのはせいぜいそれだけ？”と問うことができる。ソルンは私を強くした。私は永遠に感謝するだろう。そしてザックは私を本物の物書きにしようとしている。それはソルンが私のために実現できなかった夢だ。そしてウェスリーは……。空っぽのワイングラスを見下ろし、彼に敬意を表してすばやく二杯目を注いだ——ウェスリーは私の頭をめちやくちやにする。

※こちらのファイルは【試し読み版】です。続きは書籍でお楽しみください。

Erotica エロティカ 溢れる欲望、極限の愛。

世界中のロマンス読者が絶賛！
胸が苦しくなるほど切ない、
支配される日々 官能ラブストーリー

15歳で知った
背徳

セイレーンの涙
見えない愛につながれて
ティファニー・ライス
藤峰みちか 訳

結婚指輪の
かわりの首輪

19歳の美少年に
かしずかれ…

『セイレーンの涙——見えない愛につながれて』
著者：ティファニー・ライス
発売日：2013年9月15日
定価（税込）：940円
ISBN：978-4-596-91562-7



【『セイレーンの涙』公式サイトはこちらから】

http://www.harlequin.co.jp/campaign/erotica_sep.html

【電子書籍の購入はこちらから】

http://www.harlequin.co.jp/hq/books/detail.php?product_id=6217

セイレーンの涙【ウェスリー編】

<http://p.booklog.jp/book/75692>



THE SIREN

by Tiffany Reisz

Copyright © 2012 by Tiffany Reisz

All rights reserved including the right of reproduction in whole or in part in any form. This edition is published by arrangement with Harlequin Enterprises II B.V./ S.a.r.l.

®and TM are trademarks pwned and used by hte trademark owner and/or its licensee.

Trademarkes marked with ® are registered in Japan and in other countries.

All characters in this book are fictions.

Any resemblance to actual persons, living or dead, is purely coincidental.

Published by Harlequin K.K., Tokyo.



<セイレーンの涙> 公式サイト

http://www.harlequin.co.jp/campaign/erotica_sep.html

著者：（株）ハーレクイン

<http://www.harlequin.co.jp/>

ハーレクイン社 公式facebook

<https://www.facebook.com/harlequin.jp>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ